
栄光と魔術のシンメトリー

フュージョン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

栄光と魔術のシンメトリー

【Nコード】

N5382F

【作者名】

フュージョン

【あらすじ】

王宮に住み込む魔導士——ティナは少々やる気のないものの、学園生活と共にそれを両立させている。そんな中、不穏な動きが王宮へと迫り……。異世界の織り成す学園×王宮？物語。

00話：プロローグ（前書き）

異世界ファンタジー物語です。

00話：プロローグ

孤独は人を冷たくする。

見えない部分を埋め尽くすように時間がそつと凍りついていく。
まるで世界を拒むように、じわじわと――。

しかしそれはいつでも壊せる、崩せる、突き破れるものだ。

人の心がその時を待っている。

いつの日か優しい温もりが凍てつく心を溶かしてくれるのを――。
または凍てつく心を壊すのを――。

今か今かと待ちわびている。

だから諦めない。だから前を向く。だから足を進める。
そんな簡単な事で人は生きれる、過ごせる、そして楽しめるのだ。
人生を――。

偶には下を向いて過ごすのもいい。泣くのも拒むのも、だ。

けれど忘れないでほしい。

人は人を求めているということを――。
そして人は場所を求めていることを――。

いつまでも永遠に、心に留めておいてほしい。

だから人は諦めない。

いつまでも続いてほしい日常を——掴むまで、絶対に。

01話：悩める少年

「諦めよう、二つとも」

リヴィエール王国のある王宮の一室にて、黒髪の少年——ティナが倒れざまに気の抜けた声を洩らす。と、同時に背後に据えたベツドがギシッと古めかしい音を立てた。

「そもそも人間っていうのは、二つの事を同時には考えられないんだよ。しかも精神的に追い詰めるかのように期限付きだし……。僕はもうお手上げ状態だよ」

ぶつくさ詭弁を呟きながらもティナは体を擦じらせて布団へと潜り込んで行く。その際もベッドが軋む事は絶えなく続いており、年季の入ったベッドの質感を部屋中に知らしめていた。

「もうっ、ぐだぐだしすぎよティナ。そんなのはただの言い訳でしょっ？ いいから早く出てきなさいよ」

赤子のように布団に包まり始めたティナに、ピシャッと喝を入れるのはファイファイである。ファイファイは人間ではなく、水の神として生を灯す『精霊』。女性を小さくした人形のようなであった。しかし表情はよく変わるもので、今は眉を寄せてティナの扱いに困った様に顔を崩している。

「そんな調子だと陛下にも、先生にも怒られちゃうよ。それでもいいの？」

「うるさいなあ。もう少し静かにして欲しいな」

「ティナ？」

「わかってるよ」

少ない言葉数で言い負かされたティナは、うんざりしたような面持ちで布団から顔を出す。

フィフィは「それでいいの」と、満足げにコクコク頷きながらふわっと体を宙に投げる。そして腰付近まで癖無く伸びた金髪を布団に垂らし、ティナの上へとゆっくり腰を下ろした。

「学校と仕事の両立は難しいと思うけど、それはティナが自分で決めたことでしょ？ だったら責任を持って取り組むのが筋だと思けど。どう思う？ ティナ」

「フィフィ様の言う通りですよ」

嫌味交じりにそう呟いたティナは、殻を破るようにして布団を払い、ふらふらと手を振ってベッドに座り込んだ。

「うむ、偉い」

それを見届けたフィフィは満足したように笑みを零して、

「大変だと思うけど、まずは武闘会のレポートを仕上げちゃおうよ。多分すぐ終わるんじゃないかな」

それに私も手伝うから、と嬉しそうに言葉を加えてティナの膝元へと場所を移した。けれどもティナの表情は曇ったままであり、

「終わらないよ……絶対。これ見てよ」

と、ティナはベッドに座り込んだまま隣に置かれた机へと手を伸ばす。そして何やら引出しから紙を抜き出して、膝元に座り込んで

いたフィフィへとそれを渡した。

「あちゃー。なるほど」

その紙にはずらつと活字が形式的に並んでおり、文章の形式や、字数の制限。そして、レポート用紙の指定までもがきっちり記されており、それを見たフィフィも驚いた様子で固まっていた。

「これはティナが嫌がるわけだね。私でもちよつとやる気が起きないかも」

「でしょ？ 多分こついつた気分になっているのは僕だけじゃないと思うんだ」

「先生も酷だね」

「陛下並みだよ、ホント」

そうやってぶつくさ呟くようにして会話をしていた二人は仲良く溜息をつく。そしてティナはもう一度温もり残る布団の中へと身を委ね、遅れてそれに気付いたフィフィは溜息交じりにそれを見つめ、布団を剥ぎに取り掛かった。

「ぎゃー」

「疲れさせないでよっ！ もうっ」

お母さんと赤子のやり取り紛いはさらに続くのである。

そもそもティナの抱えている問題は何なのかというと、レポートの提出。そして仕事に関してのことだった。

『レポートの提出』——それはティナの通う学校、即ち、スリヴェール魔術高等学校からの課題であり、十日後に行われる武闘会についての事前学習であった。

本来勉学に勤しむ場であるはずの学校で何故、武闘会などという危な気な催しを学校主催で執り行われているかという、ある程度将来的に有望な生徒を見出す目論見があつてのことだった。

というのもスリヴェールに在籍する殆どの生徒は三年の授業を終えて卒業した後、魔術を扱う仕事へと就職することが多い。なので早めに有能な生徒を見つけ、息を掛けておこうと魔術関連企業の業者の人たちや、国事に関わる者、そして、王族までもが生徒達の才能、及び努力量を図りに視察として訪れて来るのである。

からして就職率や有能度、そして世間体を気にするスリヴェールとしては是が非でも成功させたい催しなのであった。

事前学習としてのレポートは、生徒達の武闘会に対するモチベーションを上げるための言わば起爆剤。即ち、大人たちの思惑が入り交じった薄黒い課題であり、生徒達からも不満のでる不評なものなのであった。

けれども武闘会自体が自身の将来を左右し、繋げることは当然の如く生徒達にも認識はされているため、盛り上がりには欠ける事はなく、逆に生徒達が全身全霊を注いで挑んでくるために、長い間消えることなく伝統行事として執り行われてきたのである。

「武闘会なんて別に参加したくないのにさ、新入生は全員参加だつて。どう思う？」

「まあ……聞いた所によると大人たちへの見世物みたいなものだから

ら、ティナには関係ないのかもね」

でもちゃんと提出するんだよ？ と、フィフィは母親のようなセリフをティナの耳元できちんと言い聞かせる。しかし、ティナは依然やる気がでないようで、「うー」と、布団の中で蠢いていた。

もう一つの悩みの種である『仕事』に関しては、ある意味ティナが『武闘会』を嫌がる理由と直結している。

というのも、言つての通りティナは現在仕事をしている。国直属の魔導士部隊に、だ。二年前くらいだろうか、ある事を切っ掛けに国からスカウトされたのである。それも直接のこと。

それまで孤児として生きてきたティナにとつて、それは雅に天からの降つてきた恵みのようであつた。住居も宛がわれ、食事も自由そしてお金も支給されるのだから文句の付けようも無い。それに魔術の事に関しては、並々ならぬ自信を抱いていたので身の保証もできた。なので、これ以上ない位気持ち良くその依頼をティナは受け入れることができ、入隊する事が出来たのである。

そのため、幸か不幸か仕事を既に抱えているティナとしては将来的希望を求めるために身を削り、必死の思いで武闘会に参加する気はさらさら起こらない。更にはモチベーションを上げるためのレポートなんてものには全くと言っていいほど身が入らないのであつた。

だからティナは困っている。体が、心が、動いてくれないことに。

「何か最近気が入らなくて困るよ。何においても……。明日は学校休みだし旅にでも出ようかな」

冗談であることは内容からして分かるのだが、布団から覗かせるティナの表情がやけに真剣味を帯びているために意図が読めない。ティナの目前に腰を下ろしていたフィフィも疲れたように「はあと、溜息をついていた。」

「学校も、仕事も……きちんとしなきゃダメだよ。いつ何処で何が起こるか分からないんだから、何かしておける内にしておかなきゃ損するよ?」

「うーん。まあ……言っている事は間違っていないと思うけど」

寝転がるティナは顎を枕に乗せて視線を目の前に座り込むフィフイへと向け「なんかねえ」と、軽い言葉を洩らす。

「ティナには危機感つてもものが足りないんだよ、きつと。だからだらけるし、やる気もなくなっちゃうの」

「さんざんな言われようだなあ、僕。そんなに信用が無いなら違う所に行けば? 真面目にきびきびと働いてて、カッコいい人。そう、それがいいんじゃないかな、フィフィには」

言いながらティナは徐に体から布団を引き剥がしてベッドから降りる。そして引き付けられるかのように机へと赴き、引出しから紙を取り出して椅子に座った。

「本気で言っているの? ティナ。私行っちゃうよ? そのカッコいい人の所に」

「行けば? 勝手に」

ふくれっ面を保ちながらも僅かながらに微笑を含み、フィフィはそのままベッドに取り付けられた天蓋へと上ってティナを見下ろした。しかし、ティナは興味なさげに言葉を返し、ペンにインクを滲

ませて紙に何かを書き始めている。

「もう……、素直じゃないんだから。手伝うことはある？」

しばし流れた沈黙を裂くようにしてフィフィが尋ねる。それに応えるようにしてティナは座ったままふらふらと手を振った。

「む……、私に意地悪しようとしてるんだね？ 冷たくされても私はティナのそばにいるよ？ たとえ嫌がられても」

「……」

「でも嫌われるのはちよつと寂しいかな」

「……」

黙々と紙に何やら書き込んでいるティナにフィフィは声を掛けるも、返ってくるのは机を叩くペンの音のみ。それ以外は何も返ってこなかった。

それを不条理ながらも不満に思ったフィフィは着こむワンピースを握りしめて、天蓋よりティナの手元を見下ろす。すると、

「武闘会のレポートじゃないじゃないっ！」

紙に書かれているものを上から除き見たフィフィは、確かめるようにしてぴょんと飛び下り、ティナの頭へと着地した。

目に入ったものは予想していたレポートとは違い、何やら幾何学的な方陣が書かれていたのである。

（魔方陣かしらね。中央に向けて有効線分が向けられているもの。模様からして空間遮断魔方陣だと思う……って）

「まさか私が逃げないように捕まえるつもりなのっ？　そして捉えた後にはあんなことやこんなことをっ！？　そりゃ私は可愛いけどそれは歪んだ愛ってものだよっ！」

記されたものを瞬時理解したフィフィは、目前に生える黒髪を思いつき引つ張りながら、問いかける。痛さの余り椅子から落ちそうになったティナからして、拷問というのが妥当であろうか。

「違う違うっ！！　僕はフィフィなんかに発情はしな、痛い痛いっ！　分かったよ。じゃあ、します。ムラムラします。……ああっ！、今何本か抜けたよ？　ブチッて音がした」
「じゃあ何なのかなっ」

依然引くことを止めないフィフィをティナは無理やり両手で掴み、頭から降ろす事によって一時治める。その際、結構な量の髪が机に落ちてきたのでティナは将来が不安になった。

「違うんだよ……これは」

言いつつも、ティナは「もうちょっと大きめに」と、それを破いて屑籠へと棄てる。やや不満の残る様子で机に腰を下ろしたフィフィは不思議そうにそれを見やっていたが、ティナの様子からしてそれ以上の返答は見込めないと踏んだのか、次第に飽きてきたらしく散らばっている髪の毛で首飾りを作り始めた。

（僕の髪が……）

片目でそれを見つつも新しく出した紙に同じような模様を、今度はやや大きめに記していく。

「出来たっ！」

「出来たわっ！」

ほぼ同時に歓喜の音が部屋の中に響き渡る。意外と息の合った二人（？）なのかもしれない。

フィフィは出来上がった首飾りを嫌がるティナに掛けさせ、笑い転げる。それを溜息交じりに見つめていたティナは、椅子から立ち上がりタンスへと向かった。

「可愛いっ！ もうお腹が……ってどうしたのティナ。もうすぐ夕食の時間だけど、まだじゃない？」

ティナはタンスの前まで行くと普段着を脱ぎ棄てて、何やら身軽そうなＴシャツを身に纏い、ズボンを履き替え始めた。それを眺めていたフィフィはまたしても疑問をぶつけ、問う。

「何処か出かけるの？ 私も付いて行っっていいかな」

机から椅子へと飛び移ったフィフィは「いいでしょ？」と、身を乗り出して返事を待つ。

しかしティナの返事はフィフィの問いかけに対し、全くと言っていほどの得てはおらず、

「僕は真面目なんだよ？……意外とね」

「……？」

「可愛いなんてまっぴらごめんさ」

壁に掛けられた『仕事用』の黒いマントを肩から羽織り、靴紐を結びなおしながらティナは、含みあり気な様子でそう返す。そのマ

ントが『仕事用』というのを知っているフィフィは、更に抱える疑問が増したようで「むむむ？」と、首を捻っていた。

「そろそろだと思っよう？ 僕の勘では……」

言うなり、身支度の終えたティナは机の上の紙を折りたたんでポケットの中へと押し込む。その一連の流れでドアへとすぐさま向かい、ドアノブを掴んだ。

「ちょ…… ちょっと待ってよー。置いてかないで！」

閉まりかけたドアの間を間髪でフィフィはすり抜けてティナのマントへと潜り込む。

と、その時だった――。

城内が揺れ、轟音が鳴り響いたのは。

「少し早かったかな」

ティナはニツと含みのある笑みを浮かべながらそう零す。そしてゆったりとした歩調で暗い廊下へと姿を消していった。

01話・悩める少年（後書き）

02話：轟音に向けて

リヴィエール王国の北東に位置する王宮は、山に囲まれる形をとってはいるものの、広大な土地を有しており、城自体も広く展開していた。

城に住まうものは王族、そしてそれを守るための騎士や魔導士、生活の水準を高くキープするためのメイドや家政婦など、多くの人々がその広い空間を共有していた。

けれども城内の作りがあまりに作品染みている——即ち、設計者の趣向に傾きすぎた造りをしているために、日常生活においての行動パターンを一切無視した造りとなっていて、住む人々の不平は絶えないものとなっていた。

例えば、階段。階段は本来、階の行き来をスムーズにするために、一定の場所に固められて設置されることが多い。それに緊急の場合には階の行き来が重要となるため、それは至極当然の事として設計されていた。

しかし、この城ではその常識が通じない。単に階段は邪魔なものとして扱われる傾向にあった。というのも、階段の設置場所が極端に狭い所や、スペースを埋めるために宛がわれているなど酷い扱いなのである。

ある一人の兵士の不満を聞いてみると、

『初めてこの城に来た時、緊張してお腹を壊してしまっただけです。僕は見習いということなのでここに来ていたので教官に許可を得て城内に行きました。けれど何なんですか？ このお城。どれだけ女子トイレが好きなんだ？』と言いたくなるほどにその数が多かった。そ

れもその数五十個。そして男子トイレはまさかの三個のみ。それには王室専用のも含まれていたから僕にとっては一つだけでした。そして――中略――、泣きました。三階にトイレがあると聞いて行ってみたんですけど、階段が二階以降見つからなかったんです。だから恥を忍んで女子トイレへ行っただんですけど――以下略』

と、赤裸々に話をした。

他にも例はたくさんあって、食堂が何故か外に設置されていることや、窓が一つもない階がある事。そして何より、道の分岐が多すぎるなど、挙げれば限がないほどに問題を抱えた城がそこにあったのである。

それは王宮に住まうティナも感じる場所であり、現に体感しているところでもあった。

「ここは二階だから……、右に階段があるんだっけ」

「違う違う、左にあるの。そしてまた右に曲がって……ああ、そっちそっち」

物覚えの良いフィフィの言葉を信じて幾度となく廊下を折れていく。そしてやつとの事で一階へと通ずる階段を見つけた時、再び轟音が城内に鳴り響いた。

「何なの？ この音……」

「ああもう。急がないと城が壊れちゃうよ」

ティナは焦ったように階段を駆け下りて、外を目指す。フィフィはそれに振り落とされまいと必死にマントにしがみ付き、轟音へと耳を傾けていた。

「やつと一階だ。……今度陛下に話して城内での魔術許可を得よう。そしたら窓から外へ行けるよ」

「荒手だね。……ああつ、もう人がたくさん集まってるっ！」

一階の造りだけは至ってシンプルであり、左右に開いた階段を駆け下りれば真正面に外へと繋がる大きな扉が見える。しかし今はその扉が人だかりによって開けられており、人を避ければ外を窺える状態となっていた。

「ちよつと退いて」

やや背の低いティナは、大人を差し置いて外を窺えるはずもなく、役職を口にして人を押しやり、外へと急ぐ。

外に出てみると生温い風がティナの頬を掠め、過ぎていく。そして城から庭園へと続く階段を下りていくと、その先に轟音の発信源たる『それ』がいた。

目下ではその轟音に気付いた衛兵達が『それ』を遠巻きに囲い、指示を仰いでいる。しかし突然の出来事ともあってか皆、慌てふためいており、冷静さを欠いている者達で殆どだった。

ティナはそれを見定めると、一度溜息をつき階段半ばで足を止める。そして視線を『それ』へと向け、観察をするかのように目を細めた。

「さつき感じた通りのやつだ。……でも、ちよつと雰囲気が違うみたい」

平然とした態度で『それ』を見据え、そう呟く。それを聞いたフ

イフィは驚いたようにマントから顔を出し、勢いよく尋ねた。

「もしかしてティナ、あれが来るって分かってたの？」

「あーうん。君と言い争いをしている間にちよつとした魔力の移動を感じたんだ。それも大きな。けれどその魔力……なんか違和感があつて、付け加えられた感じがするんだよ。現に今もそれを感じてる」

「言い争いじゃなくて説教よ？ もう。……で、付け加えられたって事は、人為的なものってことなの？」

「そこまでは分からないけど……」

やや納得がいかなそうな表情でそう言うティナは、口を尖らせ頭を掻いた。肩に乗るフィフィは不思議そうにそのティナの横顔を眺め、首を傾げている。

至って普通の会話を取り持つ二人ではあるものの、階段下の状況はあくまで緊張の走る緊急事態。『それ』を取り押さえようと兵士たちが悪戦苦闘、縄を投げたり術を使ったりと必死な様子で戦闘、捕縛を繰り返していた。

「隊長！ ティナ隊長！！」

突如として背後より、ティナの名を呼ぶ女性の声が響き渡った。しかしティナは反応する事無く、依然として『それ』を見据え立っている。

その女性はティナの態度を少々不満に思ったのか、遠くからでも窺える美貌をやや歪ませ、小走りにティナの元へと駆け寄ってきた。その際、腰まで伸びた癖の無い金髪がティナの頬を掠め、流れていく。

「隊長……探しましたよ。隊長の部屋まで行っただけですが、入れ違
いになったようですね」

息を切らしつつも階段を駆け下りてきたのは魔導士部隊率いるテ
イナの部下、ミーナである。本名はミーナ・ミルツ・シルフィリ
ア。生粋貴族の血を引く十七歳の美人女性だ。

もともと魔導士部隊隊長には貴族が実力と共に就任するのが普通
なのだがティナは貴族どころが平民。更には孤児であつた。

からして率いる部下達にはあまり言う事を聞いてもらえず、ティ
ナ自身も積極的に部下達へと介入していかなかったため、隊長に就
任した当初、部隊がばらばらになつてしまつたのである。

そこへ仲を取り持つようにして割り込み、なお且つ部隊を良い方
向へと導いてくれたのがこの女性——ミーナなのであつた。

「ごめん。声をかけるのを忘れてた」

「いいえ、別に良いのです」

ミーナは息を整えつつそう言つて「あれはなんですか？」と、前方
を指さしてティナに尋ねる。ティナは一度考えるようにして目を瞑
つたが、考えが纏まつたようで、一人コクンと頷いた。

「色が変色しているのと、所々変な突起物が付いているけれど……
あれはドラゴンだよ。それも……」

「それも？」

「種類はリトルドラゴンだ。口から火が零れ出ているあたりが特徴
だしね」

と、ティナはドラゴンの口元を指して説明を加える。ティナの指

さす辺りをミーナはまじまじと見つめ、

「なるほど。そう言われてみれば……そう見えます」

美貌に皺をよせながらミーナはティナの推察を肯定した。ティナはそれより気になる事があるようで、ミーナに説明をし終えるなり目を瞑って唸り始めた。

「どうしましたか？ 隊長」

ティナよりも幾分背の高いミーナが腰を折り、顔を覗き込むようにしてそう尋ねた。しかしティナは「別に何でもないよ」と、ミーナの詮索を打ち切って目を開け、ドラゴンをもう一度ゆっくり視界に取り込み、前方を見据えた。

城の敷地内に入り込んだドラゴンの数は一匹。大きさは約五メートルくらいで、色は煤けた黄土色をしている。堅い鱗に覆われ、長く伸びた首の付け根には左右に開けた翼が生えており、城の至る所にそれがぶつかって破壊を繰り返していた。鋭い爪を持つ二本の足もそれは同じことであり、丁寧に整えられた庭園を引っ掻きまわし、見るに堪えないものに豹変させていた。

「如何でしょうか、隊長。方陣を敷いて、睡眠の術式をかけさせれば、おそらく。……いや、少々無理がありでしょうか。あの様子では」

「……そうかもね。ちょっと暴走気味だ」

改めてドラゴンを見返せば、何かの束縛から逃れるようにして暴れ狂っている。体を使って破壊を繰り返すと言う事は、自身の体にも影響が及ぶということだ。それが如何に堅く頑丈な鱗で覆われて

いようとも正気沙汰だとは思えない。現にドラゴンの体に傷がいくつも見受けられるので哀れにも、可哀想にも思えてくる。

そこまでざっと思いを巡らせたところでティナは「はぁ」と深い溜息をつき、

「僕が止めに行くかな。あのドラゴン」

苦渋に悩むような面持ちでボソリとそう呟く。辛うじてその声を聞き取ったミーナは目を見開き「本当ですかっ!？」と言って驚きの表情をつくった。それを不満に取ったティナは、冷やかな視線をミーナに向けて送る。

「すみません。意外だったもので」

ティナの視線に気付いたミーナはさっとマントを払って頭を下げる。それを横目で見ていたティナは何故かその時、顔を朱に染め、視線を払った。

「……?」

それを上目使いで見ていたミーナは少々首を捻る動作をした後、頭を上げてティナの顔を見据える。その時にはもうティナは真面目な顔に戻っていて、ドラゴンをじっと見つめていた。

（この人は……）

真面目な顔をするティナを見てミーナは少しばかり思案にふける。けれどもそれはさらに大きくなった轟音によって遮られ、ふと我に返った。ドラゴンが城に向け進行してきたのである。

「僕は行くよ。ミーナはここに残って城内の人たちの誘導をお願い。……多分影響は無いと思うけど、一応ね」

「っ！？」 私はティナ隊長と共にドラゴンと戦うつもりでいたのですが……、だめですか？」

すたすたと階段を押していくティナに向けてミーナは焦ったように声を掛ける。けれどもティナは止まることはなく、首を振って一言。

「可愛い下着だね」

場違いな言葉を残して悠然と階段を下りていった。残ったミーナはというと、白い肌を真っ赤にして「みっ……、見たんですかっ！？」と、叫び、

「いつもは服を着ていますっ！　今回はっ……時間を優先し、それに下着ではなく夜着ですっ。それに下着はっ……」

と、喚くようにして言い張る。しかし、それ以降の言葉は轟音に打ち消されティナの耳に届く事は無かった。ただギャギャーという金切り声がティナの耳元に雑音として届いてくる。

（ミーナがあんなのをねえ。意外だったよ）

苦笑しつつもティナはゆっくり足を進めていった。

「ミーナはなんで連れて行かなかったの？ 本人が行きたいなら連れて行けばいいのに」

ミーナを置いて長い階段の下付近まで行くと、今まで静かにマントの中で身を潜めていたフィフィがひょっこりと顔を覗かせて不思議そうにそう尋ねた。

残り僅かな階段を残して徐に足を止め、悠然とドラゴンと対峙したティナは、それでもきちんと返事し、

「女性の肌に傷がつくのはいけないでしょ？」

やや微笑を浮かべながらそう零した。それを聞いてマントからずり落ちそうになったフィフィは、呆れたように溜息をつく。

「柄じゃないのっ。…… 本当の理由は何よ。まさか恋してるのか？ ミーナ相手に」

「はい？ 違うさそんなの。ミーナは可愛いし美人だとは思っけど、恋愛対象じゃない。…… っていうより恋なんていう無駄な感情は僕にないよ」

こちらも呆れたように肩元へと視線をやり、言葉を投げかける。ドラゴンが目前に迫っているというのに。

「まあいつか。後で聞けばいいしね。私はここまで、だからあとはよろしくー」

簡単に折れてくれたフィフィに感謝しつつ、ティナは「また後で」と、飛んで行くフィフィに向けて声をかけた。

（後があつたら……いいけど、ね）

一人残ったティナは大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。
冷静に冷静に、と。

（今頃本当はご飯食べてたのになあ……。ホント間が悪いんだから）

気を紛らわせるようにしてそう思い、瞬間、ティナは地面を蹴り
高く飛躍していった。

何も、武器さえ持たずにただ——ドラゴンへと挑んでいく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5382f/>

栄光と魔術のシンメトリー

2010年10月10日21時38分発行